

## 061. ダニエル・マローの庭園ーヴェルサイユからハウステンボスへー

久末弥生 (大阪市立大学大学院創造都市研究科都市政策専攻准教授)



### 1. はじめに

長崎県佐世保市のテーマパーク型リゾート「HUIS TEN BOSCH (ハウステンボス)」のシンボルは、広大な庭園を擁するパレスハウステンボスです。オランダに実在する宮殿の外観が忠実に再現されたパレスハウステンボスは、ハウステンボス内の多くのアトラクションの中でも人気の高い施設ですが、その庭園がフランスのヴェルサイユ宮殿の庭園の隠れた系譜であることに気づく人は少ないでしょう。

本稿では、日本のパレスハウステンボスの庭園とフランスのヴェルサイユ宮殿の庭園の関係を、忘れられた1人の造園家に着目しながら概観します。





## 2. 造園家の光と影—ル・ノートルとマロー—

オランダのデンハーグ郊外に、パレスハウステンボスの最初の宮殿と庭園が建設されたのは、1645年のことでした。のちにイギリス王ウィリアム3世 (William III、1650-1702) となるオランダ総督 (Stadtholder) のオレンジ公ウィリアム (William of Orange) は、パレスハウステンボスの大改築を決意し、その設計をフランス人造園家ダニエル・マロー (Daniel Marot、1661-1752) に託しました。ユグノー (フランスのカルヴァン派プロテスタント) 教徒だったマローは、1685年のルイ14世によるナントの勅令の廃止 (révocation de l'édit de Nantes) の際、宗教的迫害を避けるために祖国フランスを去ってオランダに渡り、そこでオレンジ公ウィリアムに仕えることになったのです。

ところで、マローがフランスで師事していたのは、フランス人造園家の大家であるアンドレ・ル・ノートル (André Le Nôtre、1613-1700) でした。フランス整形式庭園 (parc à la française) の最高傑作とされるヴェルサイユ宮殿の庭園を設計したことで知られるル・ノートルは、17世紀当時のフランスで最も成功した造園家だっただけでなく、現代においてはモダンランドスケープデザイン (Modern Landscape Architecture) 史の祖とも位置づけられる偉大な人物でした。ル・ノートルによる設計は他にも、チュイルリー宮殿の庭園やヴォー・ル・ヴィコント城の庭園、フォンテーヌブロー城の庭園などの多くのフランス整



写真1～3 パレスハウステンボスの庭園 (日本)

形式庭園、さらにパリのシャンゼリゼ大通りのような都市計画にまで及びました。

実際、オレンジ公ウィリアムのためにマローが設計したパレスハウステンボスの庭園のスケッチは、師匠ル・ノートルが設計したヴェルサイユ宮殿の庭園に非常によく似た整形式庭園でした。マローは他にも、オランダのローゼンダール庭園やトウィッケル庭園、ヘットロー庭園などの設計を手がけてオランダ・バロック式庭園と呼ばれる庭園形式を確立させますが、美しい幾何学模様を最大の特長とする点で、オランダ・バロック式庭園がフランス整形式庭園の系譜であることに間違いはありません。もっとも、パレスハウステンボスの大改築は宮殿について1733年に着手、1754年に内装が完成されたのみで、マローが設計した庭園は実現されませんでした。1688年12月





(写真5)

から1689年2月にかけて勃発した名誉革命 (Glorious Revolution) によりイギリス王ウィリアム3世となったオレンジ公ウィリアムが去ったのち、次第に凋落していったオランダの財政状況は厳しく、さらにマローの庭園設計は後継の支配者たちの好みに合わなかったからです。

### 3. 忘れられたフランス人造園家

1689年12月に権利章典 (Bill of Rights) が正式立法化されたイギリスに、ウィリアム3世を追って、マローもやがてオランダから渡って来ました。イギリスでは、ロンドンのハンプトンコート宮殿で“parterre”と呼ばれる花壇と道を装飾的に配置した庭をいくつか設計した他、パリ生まれのマローは、フランス風家具のデザイナーとしても人気を集めました。しかし、ウィリアム3世没後にマローは再びオランダに渡り、そこで生涯を終えました。

1685年からほぼオランダで活動していたマローですが、彼の手がけた庭園設計あるいは家具デザインはすべてフランス様式で貫かれています。もっとも、祖国フランスでマローはほとんど評価されておらず、ダニエル・マローの名を知るフランス人はむしろ稀というのが現状です。

### 4. おわりに

歴史に埋もれていたマローの1枚の庭園設計スケッチが、300年もの時を経て遠い異国の日本でパレスハウステンボスの庭園として鮮やかに出現したのは、1992年のことでした。ハウステンボスの開園からさらに20年を経て、庭園の緑がいつそう濃く、木立が着実に高くなっていく現代の庭園の様子は、マローの目にどのように映るのでしょうか。



(写真6)

写真4～6 ヴェルサイユ宮殿の庭園 (フランス)



(写真7)

写真7 パレスハウステンボスの庭園内の案内立て札(日本)

### 【参考文献 (50音順)】

- 池田武邦 [1999] 『ハウステンボス・エコシティへの挑戦』(かもがわブックレット127)、かもがわ出版。
- 神近義邦 [1994] 『ハウステンボスの挑戦』、講談社。
- 武田史朗・山崎亮・長濱伸貴編著 [2010] 『テキストランドスケープデザインの歴史』、学芸出版社。
- 日本設計編 [1994] 『ハウステンボス—設計思想とその展開』、講談社。
- 久末弥生 [2013] 『フランス公園法の系譜』(OMUPブックレット No.42)、大阪公立大学共同出版会。